

Jane Eyre における絵

吉田尚子

はじめに

Charlotte Brontë (1816-55) は画家を目指した弟の Branwell の影響もあって、画家になりたいと思うことがあった。彼女は子どもの頃、絵を描くことに夢中になり、年鑑から銅版画を模写したが、その際、あらゆる小さな点まで書き込み、六か月後にはそれを忠実に模写したものが出来上がった。彼女は特に当時の流行画家だった John Martin の絵が気に入り、彼の挿絵からヒントを得て、妹や弟たちと創作した “Glass Town” の人物たちの絵を描いた。Charlotte は絵を写すのに目を酷使し、そのために視力が非常に弱くなったほどだった¹⁾。しかし、やがて自分には画家になるほどの才能がないとわかり、物語に絵をつけるということをあきらめ、その代わりに物語を「書く」という方法を見つけたのだった。彼女は絵画によって自分の考えを表わす表現方法を学びたかったが、物語を絵に描くことの能力の限界を知り、「書く」という自分にとってより良い方法を選んだのだった。*Jane Eyre* (1847) が完成した後、その挿絵を描くように勧められたが、彼女は絵は専門家が描くか、あるいはむしろ絵をつけない方が良いと思うと言ったそうである。

Charlotte は物語を書くことと並んで、絵も描くことを学び、「アングリア物語」などの登場人物の挿絵を描いていることからすると、小説を書く際にも絵画の影響があっても不思議ではない。Charlotte Brontë の作品の中でもとりわけ、*Jane Eyre* と絵との関係は深い。主人公の Jane は小さい時から絵に強い興味を示し、その才能を持つ女性として描かれており、Lowood の学校ではフランス語と絵画が特に良い成績で、彼女が描いた絵についての描写がある。そのため、絵は Jane の自己表現の手段だったと言って良い。その上、小説の中の描写には絵を描く時に用いる方法からヒントを得たと思われるような視覚に訴える表現が多い。Jane の Reed 夫人に対する激しい怒りを「生き物のようにきらめき、なめつくすように真っ赤に燃えさかるヒースの山」と比喻し、また、自分の怒りが爆発した後の後悔の混じった空しくわびしい気持ちを「火災が消えた後のまっ黒に焼き尽くされた草原」の姿に例えている。また、Jane は Rochester から果樹園でプロポーズされるが、その後、そこにあったマロニエの木が雷に打たれて真二つに割

れたと聞かされる。それは二人の結婚話がこわれることを暗示しているようで、後日、Janeが見たその木は真ん中から黒く引き裂かれて立っていた。しかし、引き裂かれた木のそれぞれの半分は互いに離れ切らず、頑丈な幹の下部は強い根が支えとなってくっついたままなので、ともかくもかろうじて、一本の木をなしていた。そのマロニエの姿は一度、こわれかけた二人の愛は根強く、最後には二人が結ばれることを暗示している。

Jane Eyre 中の風景描写などは Charlotte の好きな画家であった J. M. W. Turner (1775–1851) の描き方からヒントを得ていると Cynthia A. Linder は指摘している²⁾。このように Charlotte は物語のプロットや人間の心理などを表わすのに視覚的イメージを使うだけでなく、描写の方法も好きな画家の絵画的方法を用いている。例えば、Jane と Rochester が初めて出会うクライマックスの場面で、薄闇の中を彼の乗った馬が近づいてくるけたたましい蹄の音の効果を一枚の絵の景色に例えている。

A rude noise broke out on these fine rippings and whisperings, at once so far away and so clear: a positive tramp, tramp, a metallic clatter, which effaced the soft wave-wanderings; as, in a picture, the solid mass of a crag, or the rough boles of a great oak, drawn in dark and strong in the foreground, efface the aerial distance of azure hill, sunny horizon, and blended clouds, where tint melts into tint.³⁾

けたたましい馬の足音があたりの深い静寂を破ることを一枚の絵において前景に黒く、濃く描かれた岩の塊が遠景の淡い色を打ち消してしまうことに例えて、音の効果を表わすのに絵の描写を引き合いに出して強く印象づけている。このように小説の描写法を絵画的表現からヒントを得ているが、Jane が描いた絵そのものを Charlotte が小説の中でどのように使ったかをこの小論において考察したい。

1. Bewick の *History of British Birds* の挿絵

小説の冒頭に伯母の Reed 夫人からうとんじられ、Reed 家の団欒から仲間はずれにされている Jane が、カーテンの陰に隠れ、食堂の出窓に座って、Bewick の *History of British Birds* を読んでいる場面がある。彼女は自分が置かれた冷たい現実から逃れるかのようにその本の超自然的な幻想の世界に浸る。一杯に引いた深紅のカーテンが右手の食堂からの視界をさえぎってくれ、その左側には庭に面した透明の窓ガラスが彼女を寒さから守ってくれた。しかし、その窓から見える十一月の風景は冷たく吹きたてられる雨と霧のためにわびしく、荒涼としていたが、Jane の目は本のページをめくりながらもその氷のような外の風景からは目を離せなかった。これまで度々、言われているようにカーテンの深紅の赤は Jane の怒りを表わし、外の氷の世界は Reed

家のような愛のない世界を象徴している。彼女がめくる Bewick の絵には北極地帯の荒涼とした人跡まれな地帯にアルプスの何倍もの高さに積み重なった氷原の説明があり、そこに次の挿絵が描かれている。

... the rock standing up alone in a sea of billow and spray... the broken boat stranded on a desolate coast... the cold and ghastly moon glancing through bars of cloud at a wreck just sinking... the quite solitary churchyard, with its inscribed headstone... its gate, its two trees, its low horizon, girdled by a broken wall, and its newly risen crescent, attesting the hour of eventide. (40)

海の中にそそり立つ岩、人影のない浜辺に打ち上げられたボート、雲間を通して、沈もうとしている難破船を照らしている冷たい青ざめた月光、墓石がある寂しそうな教会、その門、木、壊れた塀、昇ってきたばかりの三日月などのわびしい風景が Jane の心の中に深く、刻み込まれる。しかし、悪魔や怪物、絞首台の絵には Jane は恐怖を感じる。

The fiend pinning down the thief's pack behind him, I passed over quickly: it was an object of terror.

So was the black, horned thing seated aloof on a rock, surveying a distant crowd surrounding a gallows. (40)

彼女は自己のイメージがないかと無意識に挿絵の中をを探し、それに相当するイメージを見つける。薄暗い墓場などの青白い死の世界の挿絵は両親のいない孤児の Jane のわびしい姿であり、この絵の中に Jane は自分自身の姿を重ねている。この挿絵は後に彼女が Lowood で描いた海の絵と似ている。両親が死んだ子どもが死の世界に注意を向けるのは当然である。しかし、それらの絵はただ、死のイメージだけにとどまらず、悪魔が泥棒の背負った包みを大地に釘づけにしている場面や絞首台の絵は罪と罰との問題をも示唆している。Bewick はロマン主義時代の人で、その絵は氷原によって表わされている遠い異国へのあこがれ、孤独、わびしさ、神秘さ、不合理、情緒などロマン主義的要素にあふれている。Jane はその後、John Reed にいじめられて、暴力をふるわれたために、彼に殴りかかるが、その罰として赤い部屋に押し込められる。Bewick の絵の中に漂う不合理的な感覚は死を連想させる超自然的な赤い部屋や Jane が抱いた激しい怒りとあい通じるものがある。小説の中で、彼女は何度も人の死に出会い、その度に死とは何かを見つめている。この挿絵は彼女の心の外にある客観物であるが、十才の孤独な少女の心情の主観的表象物と言える。冷たい現実社会をかろうじて一枚の赤いカーテンでさえぎることで楽しい幻想

の世界に浸る Jane は自己と他者、個人と社会、空想と現実のディレンマに陥っている。

2. Lowood における成長の証としての絵

Jane は特に無口で内気なので、小説の中で Jane が描いた絵は彼女のビジョンを表現する重要なひとつの方法であり、彼女の心の内を客観的に表わす効果的な手段である。これらの絵は彼女の感情や心の中を外に表わす手段となっており、描かれた時期の順にこれらの絵をたどっていくと彼女の成熟していく姿がはっきり図形化される⁴⁾。Lowood で Jane は Temple 先生と Helen との出会いによって様々な面で進歩する。監禁された赤の部屋の「赤」で象徴される Gateshead 時代の Jane の激しい怒りの感情はその二人によって教育を受けることで、抑えることを学ぶ。Gateshead では自分の心情を表わすのに Bewick の挿絵の中にその相対物を見つけ、それを受身的にただ吸収するだけだったが、ここでは自分の思っていること、感じていることを絵に表わせるほど、十分、成長したのである。Brocklehurst によって貼られた「嘘つき」のレッテルという悲しい重荷から開放された後、彼女は努力によって自分の進む道を切り開いていく決心をして勉学に打ち込んだので、めきめきと力をつけていき、フランス語と図画を始めることを許された。

I learned the first two tenses of the verb *Être*, and sketched my first cottage (whose walls, by the way, outrivaled in slope those of the leaning tower of Pisa) on the same day. That night, on going to bed, I forgot to prepare in imagination the Barmecide supper, of hot roast potatoes, or white bread and new milk, with which I was wont to amuse my inward cravings. I fasted instead on the spectacle of ideal drawings, which I saw in the dark—all the work of my own hands; freely penciled houses and trees, picturesque rocks and ruins, Cuyp-like groups of cattle, sweet paintings of butterflies hovering over unblown roses, of birds picking at ripe cherries, of wrens' nests enclosing pearl-like eggs, wreathed about with young ivy sprays.(106)

Jane が絵を描くことがここではじめて言及されるが、夜、ベッドの中で彼女が描く想像上の絵の題材にそのときの彼女の心境が表れている。絵として想像されたものは幸せそうな家庭生活を感じさせるし、そこに描かれた自然が温和であるということは Jane が Lowood の学校の立派な生徒として受け入れられ、またその社会に属していることにほっとした Jane の安堵感が表れていると言ってよい⁵⁾。Jane が Thornfield に出発する直前に Bessie が Lowood の学校を訪ねて来た時、壁に掛けられた彼女の描いた絵を見た。

‘That is one of my paintings over the chimney-piece.’ It was a landscape in water colours, of which I had made a present to the superintendent, in acknowledgement of her obliging mediation with the committee on my behalf, and which she had framed and glazed.

‘Well, that is beautiful, Miss Jane! It is as fine a picture as any Miss Reed’s drawing-master could paint, let alone the young ladies themselves, who could not come near it : and have you learnt French?’ (123)

このガラスのはまった額縁に入れられた絵の内容は水彩画で「美しい」という以外は書かれていないが、ここで Jane の二つのレベルでの進歩を表わしている。つまり、絵とフランス語の進歩に見られるように彼女の教育的進歩を示している。また、精神的な進歩では自己の激しい感情を抑制できるようになり、気質が、穏やかになったことなどは彼女が選んだ題材からわかる。実際的な性格の Bessie はその絵を Miss Reed の絵と比較してほめていることから、それは Jane がレディーとしてのたしなみを身につけた証であることを示している。そして、またその絵の出来ばえから、経済的に教師として自立していくことが可能になったことをも表わす。このように十八才の娘の心情、境遇など、主観的、客観的状況を絵によって表わしている。Charlotte は Jane にとって絵という自己表現をする手段が必要であることをここで示し、物語の方法のひとつを確立したのである。

3. Rochester に見せた絵

Jane が個人的な感情を表わして描いた絵は Rochester が選んだ三枚の絵である。心の最も奥深くにある精神構造が表れるのは人間の理性が自制力を失う所、つまり、想像が働く所であり、意識と関係なく、思わず知らず行なう本能的な行為の中に人間の本心が最も忠実にさらけ出される⁶⁾。彼女がそれらの絵を描いている時、「夢中であった」こと、「芸術の夢の国に遊んでいた」ことからするとその絵はまさに彼女の「最も奥深くにある精神構造」を表わしていることになる。これらはトーンと主題においてロマンティックな絵で、ロマンティズム的ビジョンを表わす画家の Turner がこれに似た雰囲気のある絵を描き、彼の絵は Jane の絵が示す神秘的壮大さを伝える⁷⁾。Jane が初めて、ゆっくりと Rochester と過ごした夜、彼女が Lowood で休暇中に描いた絵を彼に見せるが、彼はそこから特に三枚を取り出して調べる。Jane は読者に向かってそれらの絵の説明を一枚一枚するが、それらはすべて自然の風景を背景にして人間の顔や姿が描かれている。Jane の説明からすると、絵のイメージは「陰気」、「非現実」、「空想的」であり、小説の冒頭に出てきた Bewick の絵と「陰気で、じとじとしている寒い景色」という点で似ているし、さらに John Martin の絵とも共通する所がある。

一枚目の絵は閉ざされた暗い遠景を背景にしてうねり高まっている海原に低くたれこめた鉛色の雲と、海に半ば沈んだ船のマストの上に止まっている黒い大きな鵜が描かれている。一筋の閃光にくっきりと照らし出されたマストの上の鵜は口ばしに輝かしい色で塗られた黄金の腕輪をくわえている。マストの下にある海の底には緑色の水を通して沈んでいる溺死体がほのかに透けて見え、腕輪を奪われた美しい片腕だけが他の手足に比べてはっきり見えている。二枚目の絵は前景にはそよ風に吹かれている草や木の葉で覆われている薄暗い山の頂きがある。たそがれのような濃い藍色の空を背景として柔らかい、薄墨色に描いた女の半身像が空に向かって立ち上がっている。その額には星を散りばめた王冠をつけ、顔にはもやがかかっているが、目は黒くきらきらと輝き、髪は雲のように陰影に満ちて、なびいている。月の光のような青白い光がこの宵の明星である幻像のうなじと薄い雲に差している。三枚目の絵は極地の冬空に氷山の尖塔がそそり立っている絵である。光の集まりが地平線に沿って槍を並べたようにほの黒く突き立っている。前景には巨大な頭が氷山にもたれていて、やせた二本の手が額を支え、顔には黒いヴェールが掛けられ、骨のように白い額とうつろな動かない片目は絶望の表情をたたえている。さらにこめかみの上に巻きつけられた黒い布のターバンのひだの真ん中には青白い淡い色の小さな火花を散りばめた白い炎の輪が輝いている。この青白い新月は王冠の形をかたどって、「形なき形」という John Milton (1608-74) の *Paradise Lost* (1667) からの言葉が引用されている。

Rochester はこれらの絵を見て、「少女にしては変わっている」というが、それらは十九世紀初期の雑誌や贈答用装飾絵本に共通した特徴がある⁸⁾。これらの三枚の絵が何を意味しているのか、これまで様々な解釈がなされてきたが、いずれにしてもそれらの絵はすべて「死」を感じさせるイメージを表わしている。Jane の愛情に飢えた孤独な暗い感情を表わしていて、トーンと主題において非常にロマンティシズム的な絵であり、その傾向は小説全体のパターンを示している。これまで、これらの三枚の絵に対してなされた解釈は多様であるが、それらを大きく分けると、ひとつにはこれらの絵は Lowood で描いたと Jane が言っているので、彼女のその時までの経験や気持ちを表わしているとする考え方である。Cynthia A. Linder によると一枚目の絵は Bewick の絵にあい通じるもので、Gateshead にいる時の気持ちを象徴したものである。二枚目の絵は Temple 先生が去った後の Jane の気持ちを表わしたもので、Temple 先生がいなくなった後の Lowood は牢獄のような狭い世界に閉じ込められているという閉塞感を感じさせ、自由を求めて、外の世界に出て行きたいと思った時の彼女の気持ちである。三枚目の絵は Milton の *Paradise Lost* の Book II にでてくる「死」の姿であり、このように、それらの絵は Gateshead と Lowood にいた時の Jane の感情を表わしたものであるとする⁹⁾。しかし、Langford Thomas は Jane が Rochester に見せたこれらの三枚の絵は彼女の過去における経験や心情のみならず、これから起こる出来事などの予告的役割をも果たすと考える。その三枚の絵はそれぞれ、彼女の生涯における三つの主な場面のテーマを表わしていて、一枚目の絵は Gateshead と Lowood、

二枚目の絵は Thornfield, 三枚目の絵は Marsh End での Jane の状況がテーマになっていると解釈し, Jane の現在, 過去における心情だけではなく, この後の Jane に起きる出来事の予言的なビジョンをも表わすとしている¹⁰⁾。彼によると, 第一の絵は Jane の子ども時代と青年期の象徴的な描写を表わし, そのイメージは精神的な孤独と失望を示している。荒れた海, 低くたれこめた暗い雲は彼女に深い心の傷を残した Reed 家と Lowood での冷え冷えとした孤独な生活を表わしていて, 海の下から見える溺死体は Helen であり, 輝くブレスレットをくわえている鵜は悪の力を象徴している。そのブレスレットは Jane が Helen との友情で知った唯一の幸福の明るさを示すが, 鵜がその死体の腕から引きちぎったブレスレットを口にくわえているのは Helen の命を食い尽くしたことを表わしている。¹⁰⁾

Robert Keefe はマストに止まっている鵜と溺死体の絵は Charlotte が小さい時から度々描いていた絵のモチーフであると述べている。「アングリア物語」と関連した “And, when you left me” の詩の中で, Maria Percy がまだ生きているのに, Zamorna 公爵は彼女が死んだかのように話す。廷臣の Sdeath が Maria を船旅に連れ出して, 彼女が寝ている間, 溺れさせることを彼に提案していた。Zamorna はそのことを想像した時に, Maria が沈んでいくのが彼の目の前に見えるようだったが, Jane の絵では鵜が Zamorna と同じように死体を眺めている¹¹⁾。

この絵の鵜は Milton の *Paradise Lost* の Book IV に出てくる「命の木に止まったサタン」を思い出させる。*Jane Eyre* では “One gleam of light lifted into relief a half-submerged mast, on which sat a cormorant, dark and large, with wings flecked with foam...” (157) とあるが, *Paradise Lost* ではサタンは “The middle tree and highest there that grew, sat like a cormorant”¹²⁾ とあるように命の木の梢に鵜のように座った。しかし, 命の木がもたらす真の命はサタンにはよみがえらず, かえって, サタンは生きている者への死を企みながら座っていた。正しく使えば, 不死のしるしとなったはずの木を, ただ遠望の足場としただけだった。この鵜のように座ったサタンは命の木の枝から笑いながら, 楽園での幸福そうなアダムとイブをねたましく見ていて, 彼らを誘惑して墮落させることを謀った。Thomas Langfold は *Jane Eyre* のこの鵜はサタンと同じように Jane の幸福をねたみ, 誘惑を通して Jane の墮落を謀る悪の力を表わしていると考え, その誘惑は第二と第三の絵で示されているという解釈をしている¹³⁾。

Thomas Langfold やその他の批評家たちによると二枚目の絵は Thornfield と関連があり, Evening Star の擬人化の絵で, Venus の愛の女神を表わし, Rochester と Jane のこれからの二人の愛を予言しているとしている。この絵だけに Rochester は触れて, その絵の山は Latmos だと言い, Jane に Latmos をどこで見たのか聞く。

“... These eyes in the Evening Star you must have seen in a dream. How could you make them look so clear, and yet not at all brilliant? for the planet above quells their

rays. And what meaning is that in their solemn depth? And who taught you to paint wind? There is a high gale in that sky, and on this hilltop. Where did you see Latmos? For that is Latmos. There—put the drawings away!” (158)

Rochester の絵に対する解釈と反応は彼の考えや感情について知る手がかりとなる。Latmos は John Keats (1795-1821) が *Endymion* (1818) の中で詠った詩の中に出てくる。Latmos は月の女神に愛される羊飼いの美青年の Endymion が住んでいた山である。純粹無垢な娘の Jane を目の前にすると Rochester は Endymion のようなそれまでの自分のすきんだ生活に対して気が咎めて、その絵をすぐしまうように言ったと思われる。更に、その絵の空に立つ女性は小説の中で姿を変えて表れるとも取れる¹⁴⁾。Rochester に気の狂った妻がいることが発覚した後も彼は彼女に Thornfield にとどまることを切願するが、Jane は道徳的に相容れない Rochester との愛を貫くか、それとも彼のもとを去って、倫理的に報われない愛をあきらめるか、心が引き裂かれて苦しみの中で夢を見る。月が白い人間の姿に変わって女の人の形となって大空に現れ、“My daughter, flee temptation.” (346) と「誘惑から逃れなさい」と言うその「母」なる女の人の言葉を聞いて、Jane は Rochester のもとを去る決心をする。

三枚目の絵には Milton の *Paradise Lost* の Book II からの引用の言葉が添えられている。それは頭に王冠をつけた「死」の姿を形容する「形なき形」という言葉である。これは Jane がその絵を死の寓話として描いたものであることを示している。巨大な頭の人物が黒のヴェールをかぶっているということからそれは女性だと思われる。ここは地獄とも考えられ、氷山の北の方には槍の形をした光が差していることから、その監獄には守衛がいると想像できる。彼女は氷山に縛り付けられているかのようにそれにもたれていて、悲しみのためにそこから逃げる気力も無さそうである。この絵もただ、単に、Jane の孤独な気持ちを表わすのに死のイメージを用いただけであるという解釈もある。しかし、これを予言的なイメージととらえるとする、それは St John との愛のない結婚を受け入れるという誘惑に苦悩する Jane の姿と取れる。*Paradise Lost* では王冠をつけていて、「形なき形」と形容されたのは「死」であった。巨大な頭は死そのもので、黒のヴェールや血の気のない額、うつろな目は St John との結婚により、精神的な死に追い込まれそうな Jane を表わしている。St John の冷たい禁欲は Jane にとって肉体的にも精神的にも死を意味し、その結婚は社会の慣習にかなうが、愛のない結婚である。その氷山は John の冷たい禁欲や愛のない結婚を表わし、頭の上の炎は Jane が抱く Rochester への激しい愛とも取れる。最後に結局、Jane は道徳的になかった愛ある結婚を Rochester とするが、その絵はその意味で Milton の『失樂園』と『復樂園』の両方の含みを持った予言と取ることも出来る¹⁵⁾。

これらの三枚の絵には様々な解釈があるが¹⁶⁾、それらが、その時までの Jane の過去における心情のみを表わしたと解釈するよりも、予言的なビジョンをも表わしていると解釈した方が、作

品を多面的にとらえることができ、読みの解釈の幅が広がる。いずれにせよ、その三枚の絵は様々な解釈を許すほどに意味深い。

4. 自己への戒めとしての絵

Jane は Rochester に彼の身分にふさわしい貴族の美しい女性の Ingram がいることを知り、身分違いの自分と Rochester との結婚などありえないことをあらためて認識し、彼をあきらめるように自分を戒めるための肖像画を描くように自分に命じる。

“Listen, then, Jane Eyre, to your sentence: to-morrow, place the glass before you, and draw in chalk your own picture, faithfully, without softening one defect; omit no harsh line, smooth away no displeasing irregularity, write under it, “Portrait of a Governess, disconnected, poor, and plain”.

‘Afterwards take a piece of smooth ivory—you have one prepared in your drawing box: take your palette; mix your freshest, finest, clearest tints; choose your most delicate camel-hair pencils; delineate carefully the loveliest face you can imagine; paint it in your softest shades and sweetest hues, according to the description given by Mrs Fairfax of Blanche Ingram... portray faithfully the attire, aerial lace and glistening satin, graceful scarf and golden rose: call it, “Blanche, an accomplished lady of rank”. (190-191)

Jane は Rochester との愛をあきらめるために、これ以後、彼との愛を夢見るようなことがあれば、身分の低い不器量な自分の絵と高貴な身分の美しい Ingram の絵を描いて、その二枚を比べることによって、自分は彼から愛されるはずがないと言いつける決心をする。そして実際に彼女は二枚の肖像画をクレヨンで描くが、Ingram をまだ見たことがないので Fairfax 夫人から聞いて、想像しながら美しい彼女の肖像画を描いた。自分の顔を大げさに醜く描いた自画像と美しい彼女の肖像画は望んだ通りに著しい対照をなしていた。それぞれの絵の下に「身寄りのない貧乏で器量が悪い一家庭教師の肖像」と「教養のある高貴な貴婦人の Branche 嬢」と書き、この絵を使って自分の感情を理性によって抑えようとした。しかし、この二枚の絵を用いることで「健全な自制」をすることによって、自分の感情を抑えようとするのは当時の道徳的時代精神の表れである。彼女は「果てしない、道のない想像の荒野をさまよっている自分の思想や感情を安全な常識の羊小屋の中へ入れようとした」のだった。理性や常識の中に自分の奔放な想像力、幻想を閉じ込めようとしたのは、ロマンチックで自由奔放なエネルギーを理性で教化しようとしたヴィクトリア朝の時代精神の表われであり、それを絵のメタファーで表わしたと言える。しかし、それは同時に Charlotte 自身が作家として小説の作風について悩んだディレンマをも表わしてい

る。彼女の文学には対照的な二つの要素、つまり、バイロンの、アングリヤ的な激しい情念とそれを抑圧する意志、理性、道徳観念がともに存在し、その二つが彼女の中でせめぎあった結果、作品の中で相反する二つのものが交互に現れている。

Jane が Rochester に見せた絵はどれもロマンティズムの手法で、彼女が心の中に持っていた寂寥感、孤独感をそのまま表現していて、当時のヴィクトリア時代の気質を代弁していなかった。しかし、自戒の念を込めて描いたこの絵はいわば、ヴィクトリア朝文化のイデオロギーを表わしていて、ヴィクトリア的モラルに基づいて、女性のアイデンティティを定めたその時代の因習的規範を感じさせる。「分をわきまえなければならぬ」という社会思潮では、敬虔、勤勉が美德とされ、妥協、教化、体面、社会的良識が重んじられ、Reed 夫人や Brocklehurst によってそれが体現されていると言える¹⁷⁾。

また、これらの絵によって Jane における変化をも表わしている。Ingram と自分の違いを引き立たせるためにある程度、大げさに描き、必ずしもありのままの姿を表わしてはいないが、それにもかかわらず、これらの絵を描くことで、Jane が、これまでのように想像の世界ではなく、現実の世界を表わすために絵を用いることに関心を持つようになった。Charlotte は Jane が現実を目覚めてきたことを示すために彼女の絵を書く能力を利用したのである¹⁸⁾。

5. Gateshead に帰って描いた絵

Rochester を恋するようになってまもなく、Reed 夫人の危篤の知らせを聞いて Jane は Gateshead に帰った時に、何もすることがないので Rochester などの想像画を描く。二つの岩の間から見える海原、空に昇ろうとしている月、月の丸い表面を過ぎていく一隻の船、はずの冠をつけた水の精、さんざしの花輪の下に座っている妖精など、めまぐるしく変わる想像の万華鏡に映るさまざまな情景を描き続けた。Lowood では Jane は人生経験が浅く、文学に題材を求めて、幻想的な絵を描いたが、Gateshead で描いたのはその時、彼女の心すべてを占めていた Rochester に対する憧れ、恋心であって、それをお伽話的に表わしている。そしてある日、彼女は Rochester の似顔絵を描く。

One morning I fell to sketching a face: what sort of a face it was to be, I did not care or know. I took a soft black pencil, gave it a broad point, and worked away. Soon I had traced on the paper a broad and prominent forehead and a square lower outline of visage: that contour gave me pleasure; my fingers proceeded actively to fill it with features. Strongly-marked horizontal eyebrows must be traced under that brow; then followed, naturally, a well-defined nose, with a straight ridge and full nostrils... 'Good! but not quite the thing,' I thought as I surveyed the effect: 'they want more force and spirit'; and

I wrought the shades blacker, that the lights might flash more brilliantly—a happy touch or two secured success. There, I had a friend's face under my gaze... I looked at it; I smiled at the speaking likeness: I was absorbed and content. (261-262)

初めは思いつくままに色々な景色を描くが、その題材は Bewick の挿絵や Rochester に見せた絵に描かれた海、月、船など同じ様なものである。しかし、そこには以前の絵から感じられる冷え冷えとした悲壮感や孤独感はなく、妖精や水の精、さんざしの花によって心が浮き浮きした気分、分の明るさを感じさせる。これは以前に絵を描いた時の Jane の状況が変わっていることを示している。初めて男性を愛することを知った彼女にはもはや以前の孤独感はなく、その心の変化がその絵に表れている。水の精とか妖精というのは Rochester が Jane を呼ぶ呼称でそれを絵に表わしていて、Jane の人生観を急激に変えた Rochester だけがこの時描いた絵のテーマになっている。従って、最後には Rochester の似顔絵が描かれるのも自然である。Jane は Rochester の絵の出来ばえに満足しているが、Georgiana はそれを見て醜いと言ったように、その評価が違うことによって、Jane がいかに Rochester に夢中になっているかが示される。Reed 家の娘二人は Jane の絵を見て、彼女の腕前に驚き、自分たちも絵を描いてもらうが、これは彼女たちよりも Jane の方が進歩したことを表わしている。Jane が描いたこのお伽話的な絵の描写によって、彼女の人生において起こった変化や進歩を目に見える形で示している。彼女の絵の内容の描写によって現在だけではなく、過去における彼女の状況とその後の変化をもさまざまなシンボルによって表わしている。

6. Moor House で描いた絵

Rochester から逃げるようにして Tornfield を去った後、Jane は St John の世話で Moor House の学校の教師になるが、そこで彼女は夜、満ち足りた気持ちで絵を描くことを日課のようにしていた。Rosamund がある日、Jane が描いたかわいらしい少女の生徒の肖像のデッサンとその付近の谷や荒野などを描いた風景画のデッサンを見つけ、その出来ばえに感嘆する。この絵には彼女の境遇や心の変化がやはり示されている。今や彼女は貧しい農民の子どもたちを教える学校の先生というつましい境遇であり、絵の題材もそこでの生活から取られた普通の平凡な題材で、その絵は現在の彼女の境遇を表わしている。

Rochester に妻がいることがわかって結婚式が中断されて、Thornfield から逃れて、荒野をさまよった時が、Jane の人生におけるひとつの転換点であった。真の意味で一文無しの放浪者になった Jane はこの時、これまで理論の上で主張してきた自立の本当の意味を認識したのだった。生まれて初めて、文字通り、経済的な試練に会い、厳しい現実を身を持って経験した彼女は絵もこれまでの空想的な絵ではなく、リアリスティックな絵の描き方になる。Jane の絵があま

りに上手なので、Rosamund は彼女に自分の肖像画を描いて貰う。Jane は、まず、Rosamund の肖像画の下絵を描く。

I felt a thrill of artist-delight at the idea of copying from so perfect and radiant a model. She had then on a dark-blue silk dress; her arms and her neck were bare; her only ornament was her chestnut tresses, which waved over her shoulders with all the wild grace of natural curls. I took a sheet of fine cardboard, and drew a careful outline. I promised myself the pleasure of colouring it; and, as it was getting late then, I told her she must come and sit another day. (395)

その後、日を隔てて、Jane はその絵の仕上げに取り掛かった時に St John が Jane をたずねて来る。

The head was finished already: there was but the background to tint and the drapery to shade off; a touch of carmine, too, to add to the ripe lips; a soft curl here and there to the tresses, a deeper tinge to the shadow of the lash under the azured eyelid. (396)

Jane は Rosamund の肖像画を描くが、そのモデルは完璧に美しい、輝かしいモデルであり、彼女はこの時、まったく画家の観点からモデルを見ている。絵の描き方の描写にも専門用語が使われているが、それは Jane がモデルの表層的面を見ているだけでなく、彼女が画家として客観的な見方が出来るようになったことを表わしている。Ingram の絵と違って、この絵は想像からではなく、実物から描いたものであり、いかにそれが Rosamund に似ているかということは Jane だけでなく、Rosamund や彼女の父親、そして St John によっても認められた。これはひとに公開されるための絵であり、これまでのように自分の気持、感情、考えを表現したいという願望を満たすため、つまり、自分だけの楽しみのために描いたものではない。Jane のこの絵に対する感情的なかわり合いは美しい顔を正確に描写する喜びだけであって、その絵はこれまでの絵に表れているような超自然的、想像的印象に基づいた絵ではなく、ここにおいて彼女は完全に客観的な、写実的な絵を描く姿勢を示している。

終わりに

Jane Eyre においては Jane の内面の世界を表わすのに、心の中をつぶさに描くだけでなく、彼女の外界にある事物の「客観的相関物」も用いている。その「客観的相関物」は彼女が触れた本、絵、自然界などだが、絵は Jane の心情、精神、思想を表わす重要な手段のひとつである¹⁹⁾。

Jane は子どもの時から、絵に興味を示し、やがて、自分でも絵を描き、かなりの才能があったようである。初めは本の中の絵に自分の心情や姿を表わした相関物を探し出し、その絵を自分の内面の世界に重ねていたが、やがて成長して自分で心や思考を絵に表わせるようになると、絵を自分の感情の客観的表現手段にしている。Jane の精神を投影する「客観的相関物」としての絵は彼女の奥深くにある精神構造に光を当てて、それを目に見える形にすることではっきりと彼女の心の内を表現することが出来る。これまで Jane が子どもの時に好んだ Bewick の挿絵から大人になって描いた Rosamund の肖像画に至るまでの絵の題材や作風の移り変わりはそのまま Jane の精神的な成長、および境遇の変化を物語っている。彼女の絵は初めの、暗い、病的なほどに陰気な絵から事物や人物の忠実な描写へと変わっていく。さらに、彼女は単に絵を描くだけでなく、美的、道徳的判断をするのにも視覚的言葉で表わしている。

Jane は Rochester と結婚した後は絵を描くことはなくなる。それまでは自分の心的風景を絵で表わしていたが、もはやその必要がなくなったからである。目が見えなくなった Rochester に代わって彼女は自分の目で見たものを彼に正確に伝えることが彼女の芸術活動になったのだ。彼女は文字通り、「彼の瞳」になり、彼は Jane の言葉の描写を通して自然や物などあらゆる物を見たのである。

【注】

- 1) Winifred Gérin, *Charlotte Brontë: The Evolution of Genius* (London: Oxford U. P., 1967), pp.42-48.
- 2) Cynthia A. Linder, *Romantic Imagery in the Novels of Charlotte Brontë* (Basingstoke: Macmillan, 1978), p.66.
- 3) Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, rpt. of 1847 (London: Penguin Books, 1985), p.143. 以後、この作品からの引用についてはページ数を引用箇所後に付す。
- 4) Jane Millgate, "Narrative Distance in 'Jane Eyre': The Relevance of the Pictures", *Modern Language Review*, LXIII, No. 2, (1968), p.315.
- 5) Cynthia A. Linder, p.39.
- 6) S. J. Lawrence E. Moser, "From Portrait to Person: A Note on the Surrealistic in *Jane Eyre*", *Nineteenth-Century Fiction*, 20, (1965), p.277.
- 7) Margaret Goscolo, "Jane Eyre and Pictorial Representation", *Approaches to Teaching Brontë's Jane Eyre*, ed. Diane Long Hoeveler and Beth Lau (New York: Modern Language Association of America, 1993), p.100.
- 8) Jane Millgate, p.316.
- 9) Cynthia A. Linder, p.40.
- 10) Thomas Langford, "The Three Pictures in *Jane Eyre*", *Victorian Newsletter*, 31, (1967), p.47.
- 11) Robert Keefe, *Charlotte Brontë's World of Death*, (Austin: University of Texas P., 1979), p. 101.
- 12) John Milton, *Paradise Lost*, rpt. of 1975 (New York: W. W. Norton, 1993), p.90.

- 13) Thomas Langford, p.48.
- 14) Robert Keefe, p. 101.; Cynthia A. Linder, p.57.
- 15) Thomas Langford, p.48.
- 16) B. McLaughlin は Thomas Langford の解釈に反論して, Jane が Rochester に見せた絵は物語の予言的なものを暗示するものではなく, Jane のそれまでの実際の傷ついた過去の経験を想像的に表わしたものであるとする。第一の絵は絵の中の光と赤い部屋の光が似ているので, これは伯父の Reed 氏の死と結びついているし, 第二の絵は Temple 先生の女神のイメージで Temple 先生の喪失に対する Jane の気持ちを表わす。第三の絵のこの殉教者のイメージは Helen であるとする。M. B. McLaughlin, "Past or Future Mindscapes: Pictures in Jane Eyre", *Victorian Newsletter*, 41, (1972), pp.22-24. 参照。Sandra M. Gilbert と Susan Gubar は第二の絵の空に浮かんだ女性は苦しみの中で立ち上がった復讐の母神とも言うべきで, それは Bertha の姿であり, 第三の絵の Milton が創り出した「死」のイメージは家父長制度の恐ろしさを表わしているとする。Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. 『屋根裏の狂女』山田晴子, 薊田美和子共訳 (朝日出版社, 1988), 三百十一ページ。
- 17) Margaret Goscilo, p.101.
- 18) Synthia A. Linder, p.41.
- 19) Synthia A. Linder, p.66.